

親鸞における憶念の解釈

高 田 文 英

はじめに

念仏思想の源流と言えば、主には原始仏教經典の六隨念の一つとしての念仏、すなわち仏隨念を挙げることが一般的であろう。仏隨念は、仏の功德を忘れずに繰り返し思念するという憶念の念仏である。こうした憶念の念仏は、称名や觀念の念仏に比べると目立たない印象であるが、念仏思想の教理史的な觀点からすればむしろ念仏本来の形という言い方もできるのである。この仏隨念について、藤田宏達氏はもとと在家的な教説であつたが、ただし単なる帰依仏という程度のもではなく、確固たる信に通ずる内容をもち出家道とも連なる面を持っていると言われている。また、情的な性格とともに、知的な想起作用という側面を含んでいる等の指摘をされておられる。^① そうした多義性ゆえのことであろうか。憶念の念仏たる仏隨念は、その後出家者の修行に取り入れられて般舟三昧などの觀念の念仏となつていく一方、特に浄土教においては凡夫救済的な称名思想・本願思想と親しい関係をもつて展開していった。^{②③} 後者の例について引文のみ列挙すれば以下のとおりである。

龍樹『十住毘婆沙論』卷五「易行品第九」

是の諸の仏世尊、現に十方の清浄世界に在す。皆名を称し憶念すべし。阿弥陀仏の本願は是の如し。もし人我を念じ名を称して自ら帰すれば、即ち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に常に憶念すべし。

（浄土真宗聖典全書一、四一四～四一五頁、傍線筆者、以下「聖典全書」と略す）
 曇鸞『往生論註』卷上、八番問答、十念釈義

此の中に念と云ふは此の時節を取らざる也。但だ阿弥陀仏を憶念するを言ふ。もしは総相もしは別相、所觀の縁に随ひて他想无くして十念相続するを名づけて十念と為す。但だ名号を称するも亦復是の如し。

（聖典全書二、四八五頁）

善導『觀經疏』「定善義」真身觀、三緣釈、親緣釈

衆生仏を憶念すれば、仏も亦た衆生を憶念したまふ。彼此の三業相捨離せず。故に親縁と名づく。

（聖典全書一、七四八頁）

善導『觀經疏』「散善義」就行立信釈

一心に専ら彼の国の二報莊嚴を思想し觀察し憶念し（五正行の觀察正行）…若し前の正助二行を修すれば、

心常に親近し憶念断えず、名づけて無間と為す。

（聖典全書一、七六七頁、括弧内は筆者の加筆）

ところで、法然の遺文に目をやると、善導の書からの引文を除けば、それまで浄土教の中に受容されてきた「憶念」についてほとんど言及がないことに気づく。しかしこのことは法然の専修念仏の教学からすればむしろ必然のことであつたと言えよう。法然は阿弥陀仏の第十八願（念仏往生の願）にもとづき、念仏の中から觀念を廃して称名のみを正定業として立てていったが、そのいわゆる念觀廃立とは、觀念の念仏のみならず、從來の多義的であつた「念仏」の中から、心念・意業の念仏にあたるものすべてを捨てることを意味するものであつた。こうした法然

の教学の中では、憶念の念仏は口称の念仏と相對するものであり、よつて正定業に対する助業の一つとしての意味を出るものではなかつたのである。

一方、親鸞の著述中には「正信念仏偈」に「弥陀仏の本願を憶念すれば 自然に即の時必定に入る」（聖典全書二、六二頁）とあるように、他力の法義をあらわす上にも「憶念」の語が少なからず用いられている。著作の中では『教行信証』をはじめ、『浄土文類聚鈔』『唯信鈔文意』『浄土和讃』『正像末和讃』『愚禿鈔』に「憶念」の語が見出される。

しかしなぜ法然が捨てたものをあえて復活させる必要があつたのであろうか。一つの教義体系の中に称名と憶念の二つを混在させれば、場合によつては聖道門的な浄土教理解への逆行ともなりかねない。事実、法然に師事したとされる法相宗の良遍（一一九四～一二五二）の著『善導大意』では次のようにある。

夫れ念仏とは専ら意の中に在り、謂く常に仏を憶して妄失せざるなり。其の意是の如くして諸行を修す。∴その諸修の行は則ち種種なり。故に此の諸行を念仏行と名づく。∴然るに此の中に於て、最も仏に親しきは是れ称念なり。是の故に之を以て念仏行と名づく。（浄土宗全書一五、五七七頁下、以下「浄全」と略す）

良遍は、常に仏を憶念して忘れないことが念仏の本質であり、称念はこの憶念相続の有効な手段であるから「念仏行」と名づけられるとする。こうした念仏理解は、みずからの心念の清浄化を基本とした聖道門的な念仏理解に寄つていと言わねばならない。そしてまた後に述べる明恵の念仏理解に通じるものである。

では親鸞は、憶念をどのように自身の教学の中に受容し、それにより何をあらわそうとしたのであろうか。本稿は『教行信証』と『浄土文類聚鈔』を取り上げてこのことを検討しようとするものである。なおその際、華嚴宗の明恵（一一七三～一二三二）による『選択集』批判との関わりという視点をもつて考えてみたい。特に『教行信

証』と『浄土文類聚鈔』の両書に關しては、明恵の主張を踏まえてこそ憶念の語を使用した親鸞の意図が正當に理解されるものと思われるからである。

一、明恵の『選択集』批判

親鸞教学を明恵による『選択集』批判との關係において捉える研究は、すでに少なからず提出されているが、改めて本稿の関心においてまずは明恵の批判を『摧邪輪』ならびに『摧邪輪莊嚴記』にもとづき整理したい。

明恵は「口称には念想必ず具足するなり」（『摧邪輪』卷上、浄全八、六九一頁下）とあるように、称名念仏には必ず「念」（例えば仏への愛樂の念）が具わっていることが重要であり、「念」あればこそ称名を「名づけて念仏とする」（同）ことができると論じている。明恵にとつてそれは善導の念仏においても例外ではない。善導の念仏は「口称と心念と和合」（『摧邪輪』卷中、浄全八、七二五頁上）したものである。例えば「散善義」に称名正定業を述べる中に「一心専念」とあるのはこの意をあらわしたもので「称名の位に必ず或いは淨觀あり、或いは淨念あり。この義に依るが故に専念」（同）と言うのであると述べている。

そして明恵は、この称名に具わる心念について「念とは即ち正念也なり。：然るに正念とは正しく菩提心に在るなり」（同、浄全八、七二三頁上）と、正念とは菩提心であるとし、この菩提心をもつて往生・成仏の正因と位置付けている。明恵は菩提心に緣発心・解発心・行発心・体（証）発心の四発心などの浅深の階梯を見て（『摧邪輪』卷上、浄全八、六七九頁上）、浄土家においてもいづれかの菩提心がなければならないとする。そして、もし九品唯凡とする善導の意によれば、未入位の緣発心を取るのであると述べ、やはり善導も菩提心をもつて「往生の正因」としていると論じる（同）。菩提心とは「法無我の理と相応する心」（同、浄全八、六八〇頁上）であり、いま

だ法無我の道理を知らない我等であつても、「仏境を縁じて毛豎流涕し希求の心を発す。この心の自性を推検するに、法無我の理を以て所依と為すと云ふ」(同)と、その心念が方向性において法無我の道理に順がおうとするものであれば、それは菩提心と言うことができるとする。

こうした理解に立つ明恵は、法然が『選択集』本願章の念声は一の釈で、「念」を「声」としたことを強く批判している。すなわち、

念とは是れ心所、声とは是れ色、心色既に異なり。何ぞ一体と為さんや。

(『摧邪輪莊嚴記』、浄全八、七九二頁上)

と、「念」は心法の一つであり「声」は色法の一つであるから同一ではあり得ないと、法相の上から両者の区別を示し、法然は無理を押して「念」を「声」とすることで、心念を廃した口称のみの念仏を主張していると批判している。

明恵は、法然は『観經』の三心や願生心(厭欣心)を説いているから心念を廃しているわけではないとする見方を許さない。法然は「菩提心を廃し別に念仏心を立」(浄全八、七〇〇頁下)でているのであるから、その心は「法無我平等心」(同)とは全く別のもので、第一義に順じない「性有の心」(『摧邪輪莊嚴記』、浄全八、七七六頁下)と言わねばならない。そんなものは仏教が説くところの心念とは別物であるというのである。

こうした明恵の教学においては、称名念仏はあくまでも「心念成就の方便」(『摧邪輪』巻中、浄全八、七三〇頁下)としてこそ意味をもつものであった。よつてもし心念を離れた口称の念仏であればその念仏は「只、空しく口舌を動か」(同、浄全八、七三〇頁下)すものに過ぎず、「風林河等の音声の如」(同、浄全八、七三一頁上)き無益なものでしかない。そしてまさに法然の説く念仏は、その無益な念仏以外の何物でもないとするのである。

そして明恵がこうした「心念」の「念」の語義について「明記不忘」の義と押さえ、これにより「念仏」とは「憶念」であるとする理解を示していることは本稿の関心において注目される。このような理解は『摧邪輪』『摧邪輪莊嚴記』のいずれにも確認されるが、その初出は『摧邪輪』巻上に見られる。ここでは善導以外の諸師の説を挙げて、いずれの諸師も往生の行業において菩提心・心念を中心としていることを述べるのであるが、その一つとして元曉『遊心安樂道』の文を引いている。『遊心安樂道』の引文中には「憶念」の語は出てこないが、明恵はその内容を「元曉の憶念」とあらわして、「善導の称名」もこの「元曉の憶念」と変わるものではないと述べている。次に善導の称名と元曉の憶念と、一応相違するに似ると雖も、始終、差異なし。何とならば、およそ念と言ふは、明記不忘の称、即ち心に在るなり。この故に念仏と言ふは正しくは心念を指す言なり。

（『摧邪輪』巻上、浄全八、六八八頁下）

そして右のように、善導の称名の本意が憶念の念仏にあるとする根拠として「念」『明記不忘』という「念」の語義を示すのである。このように「念」を明記不忘の義とし、念仏を憶念の念仏と押さえることは、明恵の念仏理解の基本であると見られる。こうした明恵の理解は唯識法相の教学に依拠したものと見られ、とくに『成唯識論』巻五に、

云何んが念と為す。曾て習ひたる境に於て心をして明記不忘ならしむるを性と為し、定の依たるを業と為す。謂く、しばしば曾て受けし所の境を數憶持して忘失せざらしめ能く定を引くが故なり。

（大正大藏經三一、二八頁中）

とある文に依るところが大きいものと見られる。明恵は右の文を『摧邪輪莊嚴記』に二文に分けて引いた上で、「此れ即ち憶念の義也」（浄全八、七九四頁上）と、やはり「念」とは明記不忘の義ゆえに「念仏」とは憶念の念

仏のこととする理解を示している。

このような明恵の「念」に関する所論は、「念」が「心念」であることを示すことで「念」を「称」とする法然の理解を駁することを第一としたものであることはもちろんであるが、それとともに、明恵が善導の行業論・念仏論それ自体をどう把握していたかという問題とも関わっている。「念仏」を憶念のこととする明恵にとって、善導の書をはじめとする浄土教の経論に多く勧められている「念仏」とは、剋実すれば口称の念仏でないことはもちろん、観念の念仏とも相違するまさに憶念の念仏を意味していた。観念と憶念は、『摧邪輪』巻中に、

念と言うは、色相等を觀照せずと雖も、心に於て明記の用あり。　（『摧邪輪』巻中、淨全八、七三五頁上）

とあり、またそのすぐ後に、

觀見は是れ慧の心所業、念は念持、是れ念の心所業なり。（同）

と述べられているごとく、同じく心念ではあっても厳密には心所を別にするのであり、もちろん憶念をもとにそこから高次の観念へと、すなわち念から慧へと深められていくべきものではあるが、善導の行業論にあつてはその中心となるものは念仏であり、すなわち憶念であると理解されていたのである。こうした明恵の理解からすれば、念仏にとって不可欠の要素とは、観慧のごとき高度な心念であるか否かということ以前に、仏や浄土を志向していくような心念が妄失することなく持たれ、絶えず相続されているか否かということであつた。明恵が『摧邪輪』巻上に引いている善導『往生礼讃』「称名は易きに由るが故に相續して、即ち生ず」（『摧邪輪』巻上、淨全八、六九一頁下）の文は、こうした明恵の善導理解を端的に代弁する言葉であつたと言えよう。

二、親鸞『浄土文類聚鈔』における憶念

以上のような明恵の所論を念頭に置きながら、続いて親鸞が憶念の語を用いた意図について検討していきたい。
なお本稿では特に『教行信証』と『浄土文類聚鈔』を考察の対象としたいが、論述の都合上、まず『浄土文類聚鈔』を取り上げる。

『浄土文類聚鈔』には憶念の語が二箇所に出るが、いずれも三法列釈のなかの行釈である。一つ目は大行出体釈につづく称名破満釈をうけての称名の転釈中に出るものである。

大行とは、則ち無碍光如来の名を称するなり。斯の行は遍く一切の行を摂す、極速円満せり。故に大行と名づく。是の故に称名は能く衆生の一切の無明を破す、能く衆生の一切の志願を満てたまふ。称名は即ち憶念なり、憶念は即ち念仏なり、念仏は即ち是れ南無阿弥陀仏なり。

（聖典全書二、二六二頁）

この『浄土文類聚鈔』の称名の転釈の意図は、如実の称名とはいかなるものであるか、その内実を明らかにすることにある。ここで憶念の語が用いられているが、この憶念は称名と相対する助業の一つとしての憶念のことではなく、他力信心の異名と見られるのである。「称名は即ち憶念なり」とは、行を信で釈すことで他力信心を離れない称名であることを示し、「憶念は即ち念仏なり」とは、信を行で釈すことで称名を離れない他力信心であることを示すものである。このようにいわゆる行信不離の道理をあらわす上に、信心の異名として憶念の語が用いられているのである。

二つ目の「憶念」も行釈の中で、『大経』第十八願文成就文ならびに弥勒付属の文の「乃至一念」に関する追釈の中（一念転釈）である。

「一念」とは即ち是れ專念なり。專念は即ち是れ一声なり。一声は即ち是れ称名なり。称名は即ち是れ憶念なり。憶念は即ち是れ正念なり。正念は即ち是れ正業なり。
(聖典全書二、二六三頁)

この文においてもやはり称名(行の一念)が問題とされ、行を信で釈す形で、称名と他力信心の不離の關係があらわされていると見られる。⁽⁵⁾

ここで考えてみたいことが、親鸞はなぜ他力信心をあらわすのに「憶念」という言葉を用いたのか、ということである。「称名は即ち是れ信心」と言つたほうがより明瞭ではないか。それをあえて「憶念」という言葉を用いたことの意図は何であろうか。筆者はこれについて二つのことを考えたい。

一つには、憶念という言葉そのものに由来する理由である。憶念の語を、親鸞が称名の意で用いていると見られる例はないように思われるが、しかしこの言葉は語義的にも歴史的にも称名と親しい性格をもっている。語義的な面で言えば、それは憶念という語のみに限つたことではなく、例えば「專念」や「正念」あるいは「一念」なども同様であり、つまり「念」という語のもつ特徴であると言つことができる。例えば「專念」について見れば、親鸞は「行文類」行一念釈では「專念」(「散善義」)を釈して「專念とは即ち一行なり」(聖典全書二、五〇頁)と称名で取っているが、一方『一念多念文意』に引く「但有專念阿弥陀仏衆生」(『観念法門』)の文については「ひとすぢに弥陀仏を信じたてまつるとまふす御ことなり」(聖典全書二、六六六頁)と信心のことと釈しているのである。また、とくに憶念に関しては、親鸞の依用する龍樹『十住毘婆沙論』『易行品』にも顕著なごとく、浄土教理史上でも称名と密接に関連して用いられてきた言葉であつた。このような憶念のもつ称名との親近性が、称名と不離の他力信心のありさまをあらわす上に適していることから、ここでは他力信心をあらわす上にとくに憶念の語が用いられたものと考えるのである。このことはさらに言えば、この『浄土文類聚鈔』においては、憶念の語そのものが

称名と不離の他力信心のありさまをあらわす意味合いをもって用いられていると見ることができるのではなからうか。そして思えば法然は、こうした称名と親近性をもつ憶念の語を称名から切り離すことで、聖道門的な念仏との違いを明確にして浄土宗の念仏が但信の称名であることをあらわしたのであるが、一方の親鸞は、むしろその称名と近い憶年の語をもって、法然の念仏の内実、すなわち称名と不離の他力信心のありさまをあらわしたと、このように見ることができようであらう。

二つには、親鸞の生きた時代的な問題であり、すなわち明恵の『選択集』批判との関わりである。ここで、明恵による批判を再度確認すれば、その批判の第一は法然の念仏理解に向けられていたと言える。法然が「念」を称と取って称名一行を立てたのに対し、明恵はむしろ「念」を心念・憶念と理解して、これを善導の称名の目的のところに据えたのである。そして、心念成就あるいは憶念相続のためでない称名など「只、空しく口舌を動か」（『摧邪輪』巻中、浄全八、七三〇頁下）すものに過ぎないと法然を批判した。つまり心念・憶念に従属する位にあつてこそ初めて称名は意義を持つというのが明恵の念仏論であつたと言えよう。

このような明恵の主張を念頭に置けば、『浄土文類聚鈔』の「称名は即ち憶念なり」という言葉は、法然の称名の本質をあらわそうとする一文であり、言わば、明恵の念仏論をうけた親鸞の念仏論が提示されているという言い方もできよう。親鸞がここで言おうとしていることは、称名は憶念のための手段ではない、称名そのものが憶念のすがたであるのだ、ということである。つまりは、一つ目の理由で述べた、称名と不離の他力信心のありさまをあらわすためという憶念の語の使用意図と、別個の理由というわけではない。明恵の批判もやはり「念」の語義に関する問題に発している部分が大きいのであつて、その意味においていま述べた二つのことは水面下でつながっている事柄なのである。なお付言すれば、以上のように理解するならば、親鸞はこの『浄土文類聚鈔』において法然の

念仏は憶念を捨てた外道の念仏などではないと反論していることになるわけであるが、親鸞がここで言う憶念とは、如来回向の法であるから明恵の主張する自力の憶念とはむしろ次元を異にした徳を具えていると言わねばならない。そして、後述するようにこの自力と他力の憶念の質に関することは、『教行信証』『信文類』の信一念釈、ならびに「化身土文類」觀經隱顯釈の善導「散善義」引文において示されていると見られるのである。

三、親鸞『教行信証』における憶念

それでは次に、『教行信証』において親鸞が「憶念」の語を用いた意図を検討していきたい。『教行信証』の上で、他力の法義をあらわす言葉としての「憶念」は、「行文類」の「易行品」引文とそれをうけた「正信念仏偈」龍樹章、「信文類」の信一念釈の一念転釈、そして「化身土文類」觀經隱顯釈の善導「散善義」引文という主にこの三つである。⁽⁶⁾先に結論的なことを述べれば、「行文類」における「憶念」の語の使用意図は、前述した『浄土文類聚鈔』の行釈におけるものと大筋において共通していると考ええる。一方、「信文類」と「化身土文類」の「憶念」の語はつながっており、これらは「行文類」とはその使用意図、すなわち所顯を異にするものと思われる。

まず「行文類」であるが、「行文類」とは真実の不行をあらわす巻であり、信心をあらわすことが中心ではない。しかし信心が問題とされていないわけではなく、真実の行を領受した如実の称名とは、他力信心を具えた称名であることをあらわそうとする意図が随所に認められるのである。「行文類」大行釈の「易行品」引文には、

是の諸の仏世尊、現在十方の清浄世界に、皆名を称し阿弥陀仏の本願を憶念すること是の如し。もし人我を念じ名を称して自ら帰すれば、即ち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に常に憶念すべし。

(聖典全書二、二四頁)

と、称名と憶念が並べて出されているわけであるが、これも如実の称名とは信具の称名でありそれゆえに不退を得るという文意のものと引用であることは明らかである。すなわちここでの憶念も他力信心の異名であるが、そこにはとくに称名と不離の関係にある他力信心であることが含意されているものと考えられるのである。そしてこのことは、次のことから窺い知ることができる。すなわち前掲の「是の故に常に憶念すべし」の一文であるが、この文は「行文類」末尾にある「正信念仏偈」龍樹章の、以下の傍線部の拠り処となっている文である。

弥陀仏の本願を憶念すれば 即の時に必定に入る

唯だ能く常に如来の号を称して 大悲弘誓の恩を報ずべしといへり

（聖典全書二、六二頁）

ここで注目されるのが、「易行品」の文では「常に憶念すべし」となっていたものを、親鸞は「常に如来の号を称して」と憶念を称名の意に言い換えてしまっていることである。これは大胆な言い換えであるようだが、裏返して言えば親鸞がこの「易行品」引文の「憶念」を、称名を離れぬ他力信心のありさまをあらわす言葉として読んでいることの証左と言えるのではなからうか。こうしたわけで「行文類」における憶念の意味合いは、先に見た『浄土文類聚鈔』行釈におけるものと基本的に同じであると思われるのである。

なおこのことに関してさらに考えるべきことは、前掲の「正信念仏偈」龍樹章の「弥陀仏の本願を憶念すれば」の「憶念」に関しては、従来、ここに信心の異名として「憶念」の語が用いられている意図は、初起の信心が初後一貫して相続するものであることをあらわすためであると説明されていることである。これはどう考えるべきであろうか。後に「常に如来の号を称して」の句があることや、憶念の語がもつ明記不忘・念の相続という本来の語義からすれば、こうした相続の意味合いが全く含まれていないと言え、それは言い過ぎになるであろう。しかしながらそうした意味合いは、「行文類」において憶念の語をもってあらわそうとされている内容としては少なくとも

中心ではないと思われる。なぜなら「行文類」全体あるいは直接の出典である「易行品」引文にしても、その中心主題は真実行をあらわすことにあり、真実信たる他力信心はあくまで真実行をあらわすために不可欠であるから出されているものと考えられるからである。その「行文類」において、他力信心とはつねに相續していくものであるということは、どうしてもあらわさねばならないことではないのではなからうか。むしろそれは、続く「信文類」で示されるべき内容であり、それを「行文類」にある憶念の語の上に読み込んでいくにあたっては、それなりの注意をする必要があるように思われるのである。

続いて「信文類」信一念釈の一念転釈の検討に移ろう。

然れば願成就の一念は即ち是れ専心なり。専心は即ち是れ深信なり。深信は即ち是れ堅固深信なり。堅固深信は即ち是れ決定心なり。決定心は即ち是れ無上上心なり。無上上心は即ち是れ真心なり。真心は即ち是れ相続心なり。相続心は即ち是れ淳心なり。淳心は即ち是れ憶念なり。憶念は即ち是れ真実の一心なり。真実の一心は即ち是れ大慶喜心なり。大慶喜心は即ち是れ真実信心なり。真実信心は即ち是れ金剛心なり。金剛心は即ち是れ願作仏心なり。願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち是れ衆生を撰取して安樂淨土に生ぜしむる心なり。是の心即ち是れ大菩提心なり。是の心即ち是れ大慈悲心なり。是の心即ち是れ無量光明慧に由て生ずるが故に。願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に。

（聖典全書二、九五頁）

この一念転釈は、第十八願成就文の「乃至一念」の「一念」に関する転釈である。すなわち、信心に関する釈である。このことは重要な点であり、『浄土文類聚鈔』では信（憶念）をもって行（如実の称名）を釈する形であったが、ここでは信（憶念）をもって信（信の一念）を釈する形となっている。つまり先にも関説したごとくここで

のテーマは行信別開したところの信心そのものであり、念仏との関係は直接のテーマとはなっていないのである。

では、ここでの親鸞は「憶念」の語をもって他力信心に関するいかなる事柄をあらわそうとしているかと言えば、この信一念の転釈は全体を通して、一念とは無上上心であり真心であり淳心であり憶念であり等々と、様々な言葉を尽くして他力信心のもつ絶対的な徳を顕彰しようとしていると見ることができよう。最後に他力信心は「仏道の正因」と主張されていることは、そのことを端的に示すものである。よって、従来ここで信心が「憶念」と言い換えられている意図は、臨終の一念まで不断に相続するという他力信心の徳をあらわすためであると説明されていることは、誠に適切な見方であると言わねばならない。

ただし検討の必要を感じるのは、この「信文類」信一念の転釈に出る「憶念」の出典に関してである。従来、その出典は「行文類」の「易行品」引文であると説明されることが一般的であるが、本稿のように「行文類」の場合（称名と不離の信心のありさま）と「信文類」の場合（他力信心の相続無間の徳）とで、憶念の語による所顕にそれぞれものを想定した場合、「易行品」引文をその出典と考えれば文脈にねじれが生じることになる。ではこの信一念の憶念は、直接にはどこに出典を求めるべきであろうか。このように考えたとき注目されるのが「化身土文類」に見られる憶念である。

「化身土文類」には、観経隠顕釈の中の善導『観経疏』『散善義』引文に憶念の語が見える。ここでは、自力による憶念と他力の信心たる憶念が、対比される形で出されていると見ることができ。まず自力による憶念として出されているのが、親鸞が要門自力の法義をあらわすものと見る至誠心積の自利真実の引文である。

又た真実心の中の意業に、彼の阿弥陀仏及び依正二報を思想し観察し憶念して目の前に現れるが如くす。

これにつづく第三觀經深心の文と照応させれば、親鸞はこうした憶念は「自心を建立して」(同) いく定散自力の信心にもとづく意業であると言うのである。これに対し、その後にかかる就行立信釈の憶念は他力信心の異名としての憶念である。

又た此の正の中に、復た二種有り。一には一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥に時節の久近を問はず、念に捨てざるは、是を正定の業と名づく。彼の仏願に順ずるが故に。∴若し前の正助二行を修すれば、心常に親近し憶念断えず、名づけて無間と為す。若し後の雜行を行ずるは、即ち心常に間断す。回向して生ずることを得べしと雖も衆て疎雜の行と名くる也。

(聖典全書二、一九一頁)

そしてこの文では、他力の憶念と自力の憶念が、「無間」と「間断」という対比において出されている。この対比は重要であり、すなわちここに、

他力の憶念——「無間の憶念」(一瞬の絶え間もない)

自力の憶念——「間断する憶念」(いかにしても無間は不可能)

という両者の隔絶した質的相違をあらわそうとする親鸞の意を読み取ることができよう。

親鸞の著述における憶念の用法には、他力信心の異名としての憶念(一瞬の絶え間もない不断常の憶念)と、折に触れては本願をおもうという行者の意識上の憶念(断続的な連続である相続常の憶念)の両方があると理解することが一般的であるが、ここで言う「無間」とは後者すなわち行者の意識上の憶念のことではない。もしそのように見れば、自力と他力の憶念の違いは程度の差でしかないこととなるから、両者の本質的な相違は明らかとならないからである。つまりここでの憶念は他力信心の異名としての不断常の憶念であり、親鸞は他力信心のもつ絶対性を、間断する自力の憶念との対比において示そうとしているのである。

このように「化身土文類」の憶念を押さえてみると、さきほどの「信文類」一念転釈の「憶念」は、直接にはこの「化身土文類」の「憶念」と彼此共鳴していると言わねばならない。すなわち、いずれの「憶念」も無間に相続する他力信心の徳をあらわす言葉として用いられているのである。

そして、こうした「信文類」「化身土文類」の憶念の語にも、明恵の批判との関わりを想定することができよう。ただしそれはすでに考察した『浄土文類聚鈔』や「行文類」におけるものとはまた別の角度からのものである。『浄土文類聚鈔』や「行文類」では、法然の称名は称名そのものが憶念のすがたであると示すことで、明恵による法然の念仏批判に応えたのであるが、「信文類」「化身土文類」ではさらに攻めに転ずるかのよう、憶念そのものについての自力・他力の比較へと展開されていると見られるのである。すなわち、「信文類」において他力信心（憶念）のもつ相続無間の徳をあらわした上で、さらに「化身土文類」においては明恵の主張する自力の憶念が、じつは善導大師が急作急走、頭燃をはらうがごとくしても、必ず間断してしまいがゆえに往生はできないと誠められているものではないことを、明恵自身が『選択集』批判において依拠する善導の文を拠り処として示そうとしているものと思われるのである。

小 結

以上のごとく、『浄土文類聚鈔』と『教行信証』に「憶念」の語を用いた親鸞の意図を考察してきた。すなわち、親鸞が憶念に込めた意味合いに関して、『浄土文類聚鈔』の行釈と『教行信証』「行文類」というグループと、「信文類」「化身土文類」というグループとでは、同じ憶念という言葉でもそれぞれに中心とする意味合い、すなわちあらわそうとしている法義の所頭が異なり、また出典となる文献にも相違があると見られることを述べたのである。

また、それぞれの文脈に即して明恵に対する批判への応答の意図を考察してきた。

中でも『浄土文類聚鈔』と「行文類」における憶念の語は、称名と不離の他力信心のありさまをあらわす言葉として用いられているとの見解を得たことは、本稿の新味の一つであろうかと愚考するがいまだ試論と言うべきものである。正念などの憶念に類同する言葉を含めて、さらに検討を深める必要がある。また、課題をもう二つ挙げれば、一つには言うまでもなく『浄土文類聚鈔』と『教行信証』以外の著作が未検討のまま残されたということである。そして二つには、先日真宗学会大会の発表時においては、法然の門弟諸師の心念・憶念に関する解釈の諸相を概観することで、親鸞の憶念の解釈が持っていた思想的な意義を述べようとする構想であった。しかし本稿ではとても門弟諸師までを視野に入れることはできなかった。とくに証空の解釈との関係性を見ていくことは困難であるが意義深いことと思われる。これも改めて今後の課題である。⁽⁹⁾

註

- (1) 藤田宏達「念仏と称名」(『印度哲学仏教学研究』四、一九八九年)、また同氏『原始浄土教思想の研究』(岩波書店、一九七九年) 五五〇～五五一頁も参照。
- (2) 櫻部建「念仏と三昧」(『奥田慈應先生喜寿記念 仏教思想論集』、平楽寺書店、一九七六年) には、仏随念と般舟三昧等の三昧思想との密接な関わりが指摘されている。
- (3) 藤田宏達氏前掲論文、徳岡亮英「憶念について」(『西山学報』三一、一九八三年) 等参照。
- (4) こうした視点からの先行研究の中でも、本稿の関心において特に裨益されるところが大きかったのが、井上善幸氏と徳岡亮英氏の論考である。井上善幸氏の論考とは「親鸞の行信一念理解について(一)―特に明恵『摧邪輪』の諸説との関連をめぐって―」(『真宗学』一一五、二〇〇七年)、同「親鸞の行信一念理解について(二)―特に明恵『摧邪輪』の諸説との関連をめぐって―」(『真宗学』一一九・一二〇、二〇〇九年)の二本である。井上氏はこれら

の中で親鸞『教行信証』の行一念釈・信一念釈を取り上げ、これらの釈に全体を通して明恵による『選択集』批判への対応という意図が窺えることを綿密に論じられている。とくに親鸞が「信文類」信一念釈に「歓喜」の語を用いた意図を、歓喜を菩提心の異名とする明恵の理解に対応するものとして明らかにされていることは、本稿において、同じく信一念釈に出されている「憶念」の意図を把握する上にも大変参考になった。次に、西山短期大学教授であった徳岡亮英氏の論考は「憶念について」（『西山学報』三一、一九八三年）と題する論考である。徳岡氏の論考は、とくに西山派祖証空に関する検討が詳細だが、その背景として阿含經典や部派仏教、そして浄土經典・善導・法然における展開を述べ、さらに親鸞にも論及された視野の広いものである。その中で特に注目したいのは、徳岡氏が親鸞と証空の憶念を、明恵による批判をうけた法然門下の教学課題という視野のもとに捉えようとされていることである。憶念に関するこうした視点からのアプローチは、管見の限りこの徳岡氏の論考のみであり、その点において氏の指摘は重要である。なお、同氏の関連する論考には「善導の念と声とについて」（『西山学報』二七、一九七九年）、「証空の念と声とについて」（『日本仏教学会年報』四五、一九七九年）がある。

- (5) この行釈にある「一念」の追釈は、従来弥勒付属の文の「一念」をうけるもので第十八願成就文の「一念」をうけるものではないとされることが一般的であるが、殿内恒氏は「『浄土文類聚鈔』の位置付けに関する一考察」（『真宗学』一九・一二〇、二〇〇九年）において、これら二文の「一念」はいずれも行信不離の行の一念をあらわすものとしての引用と見るべきであり、そこに「あくまで「行信不離」の中で、法然により説示された称名念仏の行を、すなわち真実信たる浄信に裏付けられた真実の不行を説こうとする親鸞の姿勢」があると、このように「浄土文類聚鈔」という著作の特殊性を論じられている。本稿の考察においても示唆を受けるところが大きかった。

- (6) 「信文類」明所被機の曇鸞『往生論註』引文に「此の中に念と云ふは、此の時節を取らざるなり。但だ阿弥陀仏を憶念して、もしは総相もしは別相、所觀の縁に随ひて心に他想なくして十念相続するを名づけて十念と為と言ふなり」（『聖典全書』一、一二八頁）とあるのは、他力の憶念とも見られるが、親鸞の引用意図は憶念の語とは別のところにあると見て、本論では取り上げなかった。

- (7) 深励師『広文類会説記』卷一六（真宗大系一五、一二六頁）など。

- (8) 『仏教大辞彙』ならびに『真宗大辞典』の「憶念」の項参照。

(9) なお龍谷大学真宗学会での発表後に、諸先生方より貴重なるご意見を頂戴した。一々のお名前は略するがここに記して謝意を表したい。